

どこまでも自分色で

自由でいること

「気の強い子でしたね」富士電子工業株式会社代表取締役社長・渡邊弘子は自身の少女時代を振り返り、やわらかな笑みを浮かべた。

父・日吉が創業した同社は当時、受託加工を行いながら熱処理設備メーカーを目指していた。弘子は妹と弟の面倒を見ながら、4歳から始めたピアノとバレエの稽古に励む毎日。本当はピアノよりもバレエのほうが好きだった。ある時、バレエのほうにもっと力を入れたくて、ピアノをやめたいと言った。「それならバレエもやめなさい」母・志乃意にびしょりと跳ね返された。母の真意は分からないが、両方始めたのだから続けるなら両方とも、やめるのも両方ともということか。

小学校の1～3学年まで学芸会では必ずピアノ担当になるのが嫌だった。4年生で現在本社のある大阪府八尾市に引っ越し、新しいピアノ教室に移ると、弘子の中で違和感はますます大きくなった。そこに通う者は皆芸大を目指せといった趣旨の教室で、声楽や作曲も行った。それはともかく、通うからにはこうせよ、と押し付けられること、決め付けられることに抵抗があった。

型に嵌められたくない。決まりきった形式や方法にとらわれることなく自由でいたい。「わたし、ずっと渡邊(姓)でいるからね」ある時ふと、弘子は父にそう告げた。幼い彼女の発言に特に強い意味があったわけではなにかも知れない。

自由でいること。しかしそのためになにより必要なのは、自分で自分の生活の糧を得

ることだった。そのシンプルな思いが、彼女の心に静かに根ざしていた。

乱読の日々

ピアノとバレエは中学一年まで続けた。中学に入って弘子が始めたのは軟式テニスだった。そして夢中になったのは読書。好んで読んでいたのは翻訳小説だったが、友人に勧められ日本文学を手にとると虜になった。漱石、龍之介はじめ明治、大正期を経て現代に至ると遠藤周作については軽めの『おバカさん』から入って『沈黙』『海と毒薬』といった純文学へと進んでゆきほぼすべてを読破した。

地元の公立高校に進学すると、弘子の読書は最早乱読といった様相を呈していた。

富士電子工業株式会社 代表取締役社長

渡邊 弘子

わたなべ ひろこ



イメージに固執せず

月間60冊は読んでいたのではない。一方で所属した硬式テニス部ではダブルスではなくシングルプレーヤーであったのは、いかにも彼女らしい。

自分色で

東京の女子大に入学した弘子の中には違和感があった。気品あるお嬢様学校だが、自分のキャラクターに合っていないのでは、と思ったのだ。

やがてマスコミの仕事に就きたいと考えるようになり、大手出版社でアルバイトを始める。職場は若い男性読者向けの雑誌編集部で、雑用だったが将来少しでも役に立てばよいと考えていた。仕事が終わると上司に飲みにつれて行かれる。世は「女子大生ブーム」。どこに行ってもちやほやされた。それはともかく、弘子を幻滅させたのは彼らが発する会話の軽薄さだった。それが自分の志望するマスコミ業界の実態だったとしたら、進路を変更するしかない。

男女雇用均等法は施行されていたとはいえ、実質的に女性が働くステージは現在と比べものにならないくらい狭い。比較的活躍できる職場としてデパート、化粧品会社、アパレル業界があり、そこに就職活動を絞った。

大手アパレルメーカーに入社。営業部門に配属されたが、やることといえば店舗での販促やディスプレイの手伝い、あとは雑用。ここでもやはり男性社会を感じざるを得ない。

それでも、すぐに大きな仕事など任せられるはずないと頑張った。

これも今や信じられない言葉だが25歳を過ぎた独身女性を「売れ残りのクリスマスケーキ」と呼んだ時代。そんな言葉など意識はしていなかったが、弘子は「イヴ」で慶応ボーイの泰之と結婚した。

名字は「渡邊」のまま。父はいつかの弘子の言葉を思い出して「おまえの言った通りになったな」とそれでも嬉しそうだった。

結婚しても自分の生活の糧は自分で得るという考えは変わらない。どこまでも自分色で——弘子は式で白無垢も白いドレスも選ばなかった。

女には向かない職業

東京にきてから6年半が過ぎた頃、父からの連絡は泰之に向けて入った。大阪に帰ってこないかという。

「私は直接そのやり取りを聞いていないんです。妹も弟も親元を離れて東京にいたし、

父は寂しかったんじゃないかしら」と弘子は思い出してそっとほほ笑む。

ともかく、夫婦して富士電子工業に入社。泰之は受託加工部門の営業に、弘子は電子機器製造部門に配属された。かつて受託の熱処理加工でいわば“日銭”を稼いでいた同社だったが、今や熱処理設備の機械メーカーとしての地位を確立していた。

思わぬ形で製造業界に飛び込んだ弘子は、アパレル会社で形だけだった営業という仕事を今度こそ極めたいと考えた。しかし、父は営業職に就かせてくれない。現場や事務など1年間あちこちらい回しにされた。

一方で弘子も、この業界でさらなる男社会の分厚い壁に直面していた。電話を受けると、相手は有無を言わず「誰でもいいから男と代われ」と催促する。女では役に立たないと決めつけているのだ。しかし、周りに男性社員がいるとは限らない。このままではせつかくの引き合いを逃がしかねない。「まあそうおっしゃらずに少しお話してください」とお伝えしたんです。取っ掛かりさえつか



自社製品のクランクシャフト焼入装置による焼入



めば、そういう方に限って、よく話してくださいました」と気さくに語る。

“男性だから”“女性だから”と自分の決め込んだイメージに固執することはマイナスでしかないというのが彼女の考えだ。

事務に配属された時のことだ。データ整理をしていて、そこにあるのが有益な営業資料であるのに気がついた。客先に何年にどんな機材を搬入しているかを知ることで新たな提案ができる資料だった。「営業マンは事務方を軽んじているし、事務のほうは疎外感を持っているから意思疎通ができていないんです。これも決めつけからきています。わたしはいろいろな部署を回ったことと、仕事がよく理解できたので、現在は新卒、中途採用にかかわらず新入社員は最初の3か月は各部署を回らせています」

弘子を自由に行っているのは、学生時代の膨大な読書経験だった。書物にはあらゆるものが書かれていたし、分からないことが出てくれば先輩に訊いた。よくないのは不明な点をそのままにしておくことだ。

根負けした父は弘子を営業職に就かせた。

弘子社長誕生

女性には無理という意識を払拭するためには成績を上げるしかない。彼女はその事実を積み重ねながら長い道のりを歩いてきた。そして18年間営業の現場で研ぎ澄まされてきた感性が、弘子にある危機を伝えた。

2007年の終わり、自動車に搭載されるエ

ンジンのレベルが落ちた。エンジン部品を扱う同社にいて、彼女はそれを目の当たりにしていた。「これはなに？」

エンジンの排気量が落ちるとは、低価格の車が売れているのを意味する。逆に言えば高い車が売れていないことになる。港には売れ残った高級車が山と積まれていた。

大きな危機が目の前に迫っている。それを乗り越えられるのは自分だけだ。弘子は会社を牽引する決意を固めた。メーカーとして同社が扱う高精度の設備は価格的に安い物ではない。「この100万円が安いと感じる人もいれば、この100円が高いと感じる人もいます。お客様に向き合う上で、わたしが社長に就くことが一番会社のためになると考えました」

時流が変わる。すべてが変わる。会社も変わらなければ。

「役員を辞めてください」弘子は、会長職にあった父に告げた。もちろん厳しい決断だった。しかし、父が会社に残ることで院政のようになっては、社員は誰について行けばよいか分からなくなる。父は意外にも、あっさりとして承してくれた。そして、当時社長を務

めていた己^{みのうへ}之上が会長に就き、弘子社長が誕生した。

08年、弘子が予測した通りリーマンショックという大激震が起こった。しかし、彼女の指揮により、会社は危機的状況をなんとか乗り越えることができた。

「一営業部員だった頃も、社長職に就いてからも、立場は違えど毎日が大変であることに変わりありません。予定通り利益が上がっているかを考え、トラブルが起こればそれに対処する、その繰り返しです。うちは会社の規模の割に財務状況が安定しているようなイメージで見られていますが、意識の上では常に自転車操業です」

弘子社長といえばお酒という声が周囲から上がる。「なんですか、ソレは？」と彼女は明るく笑った後で、「お酒は心の友かも。毎日飲んでいるので、誰よりも一緒にいる時間が長いかも知れませんがね。仕事から帰って自宅での夕食はどうしても九時を回る。料理は好きで和洋中を問わず煮込みが得意。」

気分転換にはシャンパンゴールドの愛車を走らせる。乗るのはもちろん助手席ではなく運転席だ。

(取材・文＝上野 歩)

Company Profile

- ◆会社名 富士電子工業株式会社
- ◆所在地 〒581-0092 大阪府八尾市老原 6-71
- ◆TEL/FAX TEL: 072-991-1361 FAX: 072-991-1309
- ◆E-mail ooooo@ooooo.co.jp
- ◆創業 1960年
- ◆従業員数 119名

エミダス会員番号: 88995

- ◆主要三品目
 - ・高、中周波熱処理受託加工
 - ・高周波誘導加熱装置およびその部品の製造販売
 - ・トランジスタ・インバータおよびその部品の製造販売
- ◆お問合せ
 - 担当: 森本 航太